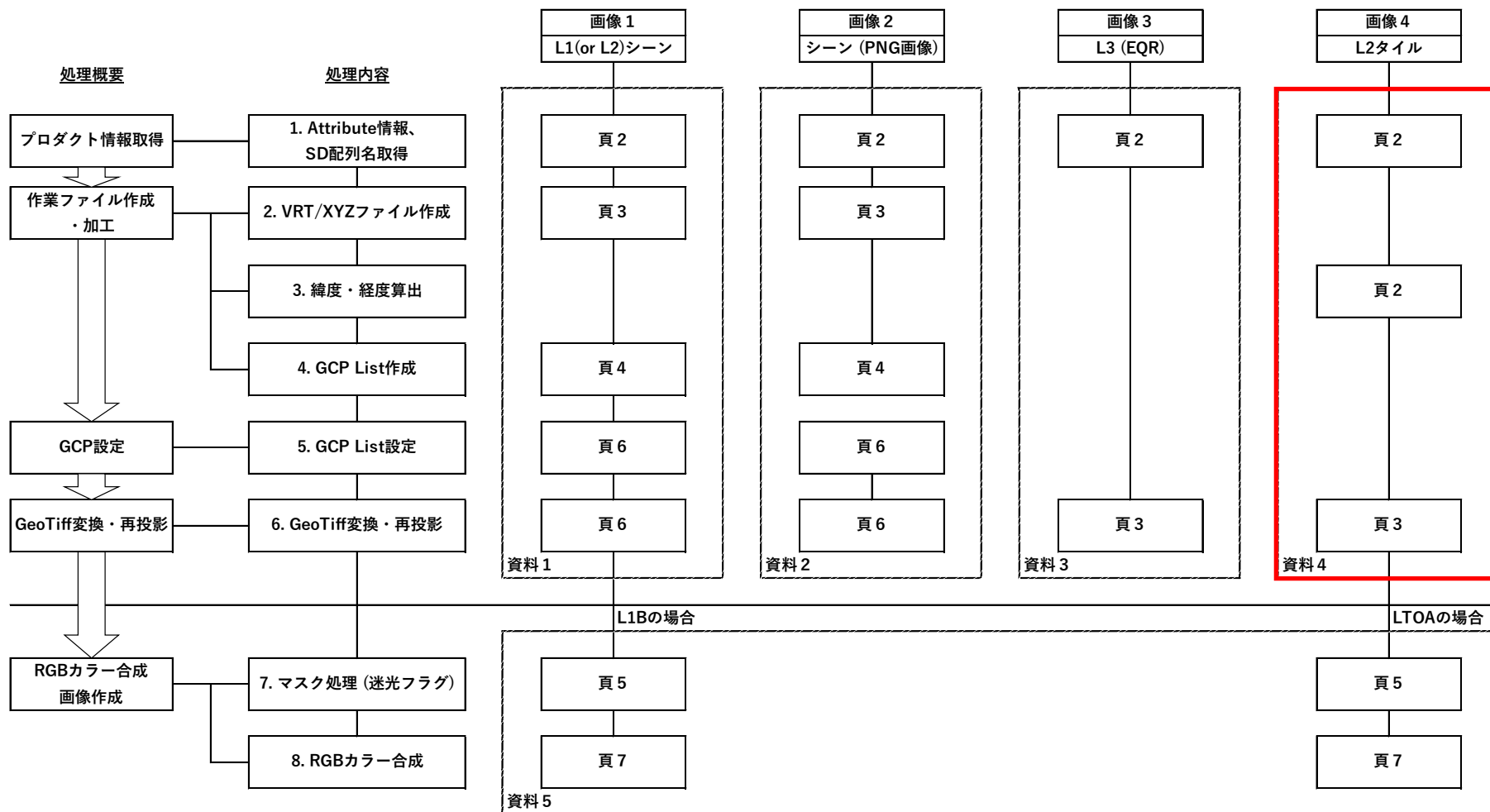


## 【画像4】 L2 EVI (拡張植生指数) タイル画像の変換例 (等面積座標系(EQA)/タイル)

ここでは、L2タイル画像のGeoTIFF変換例を紹介します。

### GeoTIFF変換フロー



## 【画像4】 L2 EVI (拡張植生指数) タイル画像の変換例 (等面積座標系(EQA)/タイル)

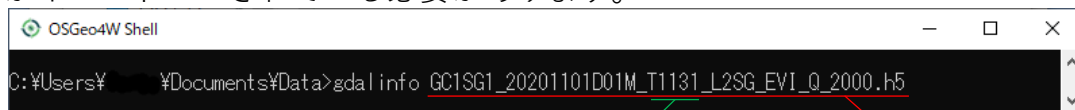
### プロダクト情報取得

#### 1) SD配列名取得

以下は、WindowsにQGISをインストールした際にインストールされるOSGeo4W Shellを使用した例です。

画像データが保存されているディレクトリへ移動して、以下のようにgdalinfoコマンドに続けてファイル名を入力し、SD配列名を取得します。

Linuxでは、端末(ターミナル)アプリケーションで使用できますが、GDALがインストールされている必要があります。

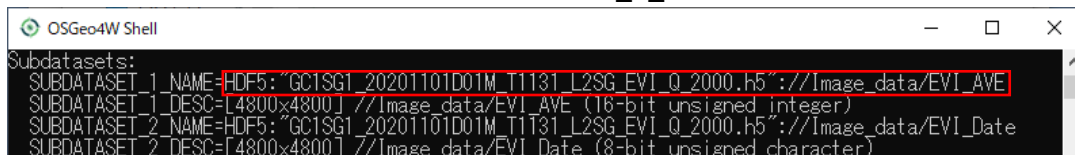


```
OSGeo4W Shell
C:\Users\¥\Documents¥Data>gdalinfo GC1SG1_20201101D01M_T1131_L2SG_EVI_Q_2000.h5
```

タイル番号:vvhh

画像ファイル名

表示される情報の下の方にあるSUBDATASET\_1\_NAMEの赤枠の情報を使用します。



```
OSGeo4W Shell
Subdatasets:
SUBDATASET_1_NAME=HDF5:"GC1SG1_20201101D01M_T1131_L2SG_EVI_Q_2000.h5":://Image_data/EVI_AVE
SUBDATASET_1_DESC=[4800x4800] //Image_data/EVI_AVE (16-bit unsigned integer)
SUBDATASET_2_NAME=HDF5:"GC1SG1_20201101D01M_T1131_L2SG_EVI_Q_2000.h5":://Image_data/EVI_Date
SUBDATASET_2_DESC=[4800x4800] //Image_data/EVI_Date (8-bit unsigned character)
```

### 作業ファイル作成・加工

#### 2) 緯度・経度算出(左上/右下)

Gdal\_translateコマンドで設定する画像データの左上/右下の座標をタイル番号(vvhh)から計算します。タイル番号は、ファイル名で確認できます。添付の「L2タイルプロダクトのGDAL変換用GCP算出シート」で計算できます。

# 【画像4】 L2 EVI (拡張植生指数) タイル画像の変換例 (等面積座標系(EQA)/タイル)

## GeoTIFF変換・再投影

### 3) GeoTIFF変換

gdal\_translateコマンドを使用して、2) で求めた緯度・経度情報等を入力し、実行します。

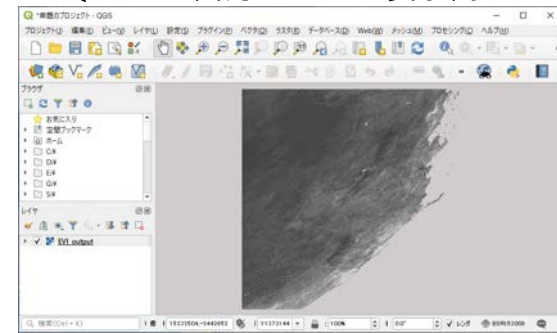
```
C:\Users\¥\Documents¥Data>gdal_translate -of GTiff -a_srs ESRI:53008 -a_ullr 14455356.756965 -2223901.039533 15567307.276731 -33355851.559300 -a_nodata 65535 HDF5:"GC1SG1_20201101D01M_T1131_L2SG_EVI_Q_2000.h5"::/image_data/EVI_AVE EVI_output.tif
```

出力ファイルフォーマット: -of GTiff  
入力ファイルの参照座標系: -a\_srs ESRI:53008  
入力ファイルの左上、右下座標値: -a\_ullr 14455356.756965 -2223901.039533 15567307.276731 -33355851.559300  
Nodataを設定: -a\_nodata 65535  
gdalinfoで取得した「SUBDATASET\_1\_NAME」の情報: /image\_data/EVI\_AVE EVI\_output.tif  
出力ファイル名: EVI\_output.tif

正常終了すると、以下のようになります。

```
Input file size is 4800, 4800  
0...10...20...30...40...50...60...70...80...90...100 - done.
```

<QGISでの出力ファイル表示例1>

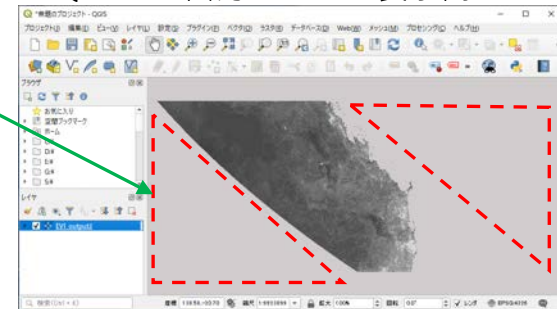


必要に応じて、gdalwarpコマンドを使用して、EPSG:4326へ再投影します。

```
C:\Users\¥\Documents¥Data>gdalwarp -of GTiff -t_srs EPSG:4326 -dstnodata 65535 EVI_output.tif EVI_output2.tif
```

出力ファイルフォーマット: -of GTiff  
出力ファイルの参照座標系: -t\_srs EPSG:4326  
投影による余白のnodata: -dstnodata 65535  
入力ファイル名: EVI\_output.tif  
出力ファイル名: EVI\_output2.tif

<QGISでの出力ファイル表示例2>



正常終了すると、以下のようになります。

```
Creating output file that is 6239P x 2676L.  
Processing EVI_output.tif [1/1] : 0...10...20...30...40...50...60...70...80...90...100 - done.
```